

アセスメントプロセスに活用するスキルの検討

—クライアントの主観に焦点を絞って—

○ 日本福祉大学 大谷 京子 (会員番号 002998)、田中 和彦 (日本福祉大学・007020)

寺澤 法弘 (日本福祉大学・005898)、吉田 みゆき (同朋大学・004027)

キーワード：ソーシャルワーク、アセスメント、クライアント目線

1. 研究目的

ソーシャルワーカーの実践力向上のためには、アセスメントスキルの向上が最重要課題の一つであることに異論はないだろう。しかしアセスメント概念は未だに共有化されず、その作業プロセスの言語化も充分になしえたとはいえない。現場でも、エキスパートが職人芸として展開しているが、それをOJTに活かしてはいない。

アセスメントスキル向上のためには、①アセスメント概念の明確化、②プロセスにおけるスキルの提示、③スキルの言語化と伝達可能な形式への転換が必要である。

そこでまず、先行研究レビューを踏まえて、アセスメントプロセスの操作定義を「クライアントとワーカー、そして周囲の状況を、ワーカーとクライアント双方が理解するためになされる、情報収集と分析のプロセスであり、ワーカーは専門的価値に基づき知識を導出し、クライアントは固有の経験知に基づき、協働して目の前の現実を解釈し共有するプロセス」とした(大谷 2013)。つまり本研究でターゲットにしているニーズアセスメントのゴールは、ソーシャルワーカーがクライアントを理解することではなく、ソーシャルワーカーとクライアントとが現状理解を共有することである。また、ソーシャルワーカーとクライアントとの認識と行為が繰り返し交換されるアセスメントプロセスモデルを提示した。

その上で、エキスパートがクライアントを理解するために活用しているスキルを抽出した。アセスメントプロセスは、ソーシャルワーカーとクライアントとの協働プロセスであるならば、クライアントの認識を研究の中に位置づける必要がある。そこで本研究の目的は、「理解された観」を中心に、クライアントがアセスメントプロセスをどのように認識しているのか明らかにすることである。

2. 研究の視点および方法

調査期間は、2013年3月21日から2014年3月27日までである。経験年数9年以上のPSW14名がソーシャルワーカー役を担い、経験年数18年のPSW1名がクライアント役を担い、同一創作事例を用いたロールプレイを実施した。面接はより深い理解を目指した3回目の面接であるという場面設定をし、あらかじめ簡単な生育歴程度の情報をまとめた事例概要を伝え、基本情報を踏まえたうえで実施した。さらにロールプレイの後に、クライアント役の調査協力者に、「理解された観」を中心に面接で得た印象を語ってもらった。その

音声を IC レコーダーで録音した。

音声データは、すべて逐語記録に起こした。クライアント役の語りの中から、「理解の共有」に関わると見なされる箇所すべてを抽出し、KJ 法にならったカードワークによって抽出された要素同士の関連を検討しながら、類似するものをカテゴリーとして整理した。

たしからしさの確保のために、研究会メンバー(10年以上の経験年数を持つ PSW4名)の member checking を行った。

3. 倫理的配慮

ロールプレイで用いた事例は架空の創作事例である。調査協力者には研究の趣旨を口頭で説明し、録画・録音データは研究以外の目的では使用しないことを約束し、調査協力の承諾を得た。その他は日本社会福祉学会研究倫理指針に従った。

4. 研究結果

抽出されたカテゴリーは、「イメージの共有」、「人としての関心」、「確認」、「ひっかかりポイント」、「タイミング」である。

例えば「イメージの共有」は、〈イメージしていることがつながっているっていう、『あ、近いぞ』っていう感覚を持てたときに、何か『分かってくれてる』って感じがすごくスルッと受け入れられる〉、〈似たような経験というか、そういう体験をした人だになっていうのを持ってくるほうがずっと入るかな…イメージがすごく、体験から来てる感じがしたのかな。分かってくれたっていうより、あ、伝わってるみたいな〉といった語りから得られた。個々のカテゴリーの詳説は口頭で報告する。

5. 考察

クライアントは、ソーシャルワーカーの理解度だけでなく、クライアントに対する関心の度合い、状況のイメージの鮮明度などを明確に認識していることが示された。また、同じ情報収集でも、アプリアリでないタイミングが必要で、相互作用の中でクライアントの話したい内容を判断し質問することが重要であった。そのためには、ソーシャルワーカーがクライアントに対して、人としての関心を持つこと、クライアントの分かってもらいたいポイントにソーシャルワーカーが気づくことが必要であり、クライアントの考えや思いへのフィードバックや確認が求められる。

本調査でクライアント役は、ベテランの PSW が担当したため、実際のクライアントの認識とは異なる可能性がある。また同一事例の同じ場面の面接を設定したため、抽出された認識は限定的であり、本調査の限界である。

アセスメントスキルの言語化と伝達可能な形式への転換、アセスメントスキルの評価尺度開発が今後の課題である。

本調査は、平成 23-26 年度文部科学省科学研究費基盤(C)の助成(課題番号 23630778)を受けて実施したものである。